

ロレッタシュワルツノバール著 アメリカの毒を食らう人たちから

第4章 大気汚染物質の循環

中略 2004年2月、環境保護局(EPA)が、新生児の水銀濃度について重大な意味を持つ予期せぬ警告を出したのだ。

その発表により、新生児の臍帯血に母体の血液よりもはるかに高い濃度の水銀が含まれていることが明らかになった。

環境保護局は、予測数の二倍の新生児が胎内で非常に危険な濃度の水銀に暴露していることを認めた。毎年、アメリカだけで63万人、すなわち6人に1人の新生児が危険にさらされていた。

中略 2004年9月に医学専門誌「ニューイングランド・ジャーナル・オブ・メディスン」が発表した。

調査結果によって、子ども時代に汚染された空気を吸うと肺の発達が損なわれることが判明した。

2005年3月には、石炭火力発電所から排出された大気中の水銀を吸い込むことと自閉症の間に関連があることが初めて報告された。

自閉症は脳の言語やコミュニケーションを司る領域の機能に異常が出る障害で障害の程度はさまざまである。この調査は、サンアントニオにあるテキサス大学健康科学センターの研究陣によって実施された。

報告書執筆の責任者であり、テキサス大学サンアントニオ健康科学センターのレイモンド・F・パーマー博士は、これはまだ予備調査だ確証が得られれば政策にとっても無視できない重要な意味を持つだろうと語った。

パーマー博士は、南カリフォルニア大学で予防医学の博士号を取得し精力的に自閉症の研究に取り組んでいる。「この調査では、テキサス州の254郡と1200の学区を対象に、2001年の水銀排出量と自閉症発症率や特殊教育を受ける子供と比較して、どんな関係があるかを調べた」

調査の最大の成果は、「水銀排出量が1000ポンド(約454kg)増えるごとに自閉症発症率が17%増加する」という関連性が見つかったことだという。

第 5 章 自閉症の急増

中略 今、親や医師、研究者の間で、自閉症の増加と乳児が受ける定期予防接種の回数との間に直接的な関係があることを指摘する声が多い。1990 年代、子どもが接種を義務づけられている予防接種が回数にして約 20 回から 40 回近くまで倍増した。これらワクチンの多くには、チメロサルという有機水銀を主成分とする添加剤がふくまれていた。

中略 アメリカでは最近まで自閉症に対する関心はあまり高くなかった。というのは、20 年前は、子どもに自閉症が生じる割合はわずか 1 万人に 1 人だったからだ。それが、今や CDC による概算では 166 人に 1 人の割合になっているのだ。

数そのものも比率も衝撃的なデータである特に急増している州ではなおさらだ。たとえば、ペンシルバニア州では 11 年間に 1600%に届きそうな増加率である。教育省の統計では、オハイオ州が 1992 年に報告した自閉症は、わずか 22 例なのに対し、2002 年には 5146 例に増加している。イリノイ州では、同じ 10 年間に 5 例から 6005 例に増加している。その 10 年間、アメリカのほとんどの州で、少なくとも 500%は増加しているのだ。

アメリカ中のいたるところから似たような親の話が聞こえてきた。

「順調に社会性や言葉が発達していた子ども 男の子の場合が圧倒的に多い が突然 2 歳くらいから新しい言葉や能力を取得しなくなり、言語能力や認識力、社会性が次第に失われ、発達が退行していった。こういう症例は退行性自閉症と呼ばれている。

このような遅発型自閉症の話は、1950 年代、60 年代、70 年代には、ほとんど聞かれなかった。

中略 アメリカの子どもたちは、環境保護局 EPA が定める暴露許容量の約 120 倍の水銀を取り込んでいたという純然たる事実であり、その間、医学専門誌は、親たちにチメロサルと自閉症の間には、関連性がないと言い続けていた。

ロバート・ケネディ・ジュニアが書いた記事「命がけの予防接種」の中で指摘されているように、歴史が示す事実はその反対だ。チメロサルを使用した最初の製薬会社、イーライリリー社は、「動物でも人でも副作用を起こし、死亡することさえあると初めから知っていた」のである。

中略 ティム・オシア博士によれば、1980 年代末以降アメリカの子どもは、「2 歳までにワクチンだけで 237ug の水銀をとりこんでいる」

オシア博士は、カリフォルニア州サンノゼ在住の監察医で執筆した論文が世界中で読まれるような人物だが、彼の説明を借りると、典型的な順序は、こうなる。まず出生当日に B 型肝炎の予防接種で安全基準の 30 倍、12ug の水銀を取り込む。生後 4 ヶ月で DPT ワクチンと Hib ワクチンを 1 日で接種する。これで安全基準の 60 倍、50ug の水銀が体内へ。生後 6 ヶ月で B 型肝炎の 2 回目とポリオを接種。

これで安全基準の 78 倍、62.5ug の水銀。1 歳 3 ヶ月で安全基準の 41 倍、50ug の水銀がさらに追加。このように 1 日で一気に大量の水銀を体内に入れることを「ボース投与」と呼ぶ。

この問題を最後まで調べていくと、チメロサールの形で体内に入った水銀は、抵抗力の弱い乳幼児にとって魚から摂取するより 50 倍も毒性が高いことが判明したこれにはいくつかの理由がある。

注射で体内に入る水銀は、口から摂取する水銀より一段と有害である。乳幼児は血液脳関門が未完成であるため水銀は、脳細胞や神経に蓄積される。最後に補足すると、生後 6 ヶ月以下の乳児は、水銀を排出するのに必要な胆汁を産生できない。

オシア博士は、エイミー・ホームズ博士の言葉を引用している。「水銀の大半は、血液から急速に消失する。チメロサール中の有機水銀は、消化器や肝臓、脳に蓄積」され・・・非常にしっかりとそれぞれの細胞と結合する。ひとたび細胞の中に入りこむと、あるいは、血液脳関門を通過すると有機水銀は再び無機水銀に変換される・・・そして、すぐに細胞を傷つけるか、何年か潜伏してから、自閉症、脳障害、消化器疾患を引き起こす」

バーバラ・ル・フィッシャーの長男も、そんな急性の副作用を起こした子どもの一人であった。

2001 年 1 月 11 日、現在、共同創業者として全米ワクチン情報センター (NVIC) の代表を務めるバーバラは自身の体験を全米科学アカデミー医学研究所の予防接種安全検討委員会で語った。「新米ママのご多分に漏れずワクチンにリスクが伴うなんて考えもしませんでした」

バーバラの息子、クリスは、2 歳半のときには人一倍明るく、賢い子どもだった。話す言葉は、ちゃんと文になっていたし、人懐っこく、そろそろ絵本も理解できるような成長ぶりだった 1980 年、4 回目の DPT ワクチンと経口ポリオ・ワクチンを受ける予定日、クリスは、少し下痢をしていて、ウイルス性胃腸炎も治ったばかりだった。

だが、看護師はバーバラに予防接種を受けても大丈夫だと請け合った。「帰宅したとき」とバーバラは当時を振り返った。

「なんだか普段よりおとなしいわ、そんな気がしました。数時間後、子ども部屋をのぞきに行くと、ロッキングチェアに座り、ドアのところに立っている私が、目に入らないかのように、まっすぐ前を見ている息子を発見しました。顔面蒼白、唇は紫色に変わり、名前を呼ぶと、白目を剥きました。首がだらりと垂れ、まるで立ったまま急に眠りこけてしまったみたいでした。どうしても息子は目を覚ましません。抱き上げると、どっしりと重くどうにかベットに運びました。そのままそこで 6 時間以上、身じろぎもせず眠り続けたのです。」

バーバラもその母親も、まさかそれが予防接種の副作用だとは考えもせず、緊急治療室に駆けつけるほどのことではないと思っていた。

役所やワクチン・メーカーに連絡すべき容態だったとも知らなかった。

同委員会でバーバラは、そのワクチン以降クリスは人が変わったようになってしまいましたと語った。絵本にも、他の遊びにも数秒と集中できない。すぐに泣き、しょっちゅう下痢をし、体重も減少した。正常な発達が止まり、耳や呼吸器が慢性的に感染症を繰り返す誰にも原因がわからなかった。あらゆる検査を受けたが、全て陰性と出た。

6歳になったクリスは、まだ文字の読み書きができず、学習障害児クラスに通っていた。結局、特殊学級で小学校、中学校、高校までずっと過ごすことになりました。

著者：ロレッタ・シュワルツ＝ノーベル ・ 東出 顕子 訳

出版社：東洋経済新報社